

第二章 調査の概要

2-1 調査対象

本研究では滋賀県彦根市中心市街地の小中学校に通う小学校五年生と中学校二年生を対象とし、各学校一クラスに調査を依頼した。その理由を以下に述べる。

彦根駅や彦根城周辺の彦根市中心市街地は、江戸時代に城下町として栄えた特徴的な街並みを残している。しかし、そのために細い路地や不自然に曲がっている道が多く、交通事故が発生する可能性が大きいと言える。そのため、この街で子どもたちが交通事故の危険をどう認識しているかを調査することは妥当だと考えられる。

本研究では、調査においてカメラを使用すること、地図でカメラの撮影場所等を把握することなど、ある程度判断能力や空間認知能力が必要であると判断したため、小学校高学年以上を対象学年とした。

学年としては、学年の近い小学校六年生と中学校一年生は対象から排除した。また、高校受験等への配慮から中学校三年生は対象としないこととした。

さらに、調査対象に偏りが少なくなるように各学校一学級を対象として選び、調査を依頼した。ただし、学校側からの申し出により、クラスではなく各クラス二名ずつの委員からなる生活委員会に依頼した中学校があった。

2-2 調査対象小中学校

2-2-1 対象小中学校の選定

彦根市中心市街地の小中学校を対象に調査依頼を行った。彦根市立城北小学校、彦根市立城西小学校、彦根市立城東小学校、彦根市立佐和山小学校、彦根市立旭森小学校、彦根市立西中学校、彦根市立東中学校の計7校に依頼を行い、調査の受け入れは城北小学校、城東小学校、西中学校、東中学校の計4校であった。他3校については危険箇所を探す調査自体の危険性を憂慮して、調査の受け入れは叶わなかった。

そこで、本研究では滋賀県彦根市中心市街地に位置する西中学校、東中学校の二中学校とその学区内にある城北小学校、城東小学校の二小学校を対象として選定した。

2-2-2 対象小中学校の概要¹⁾

調査対象とした小中学校は、城北小学校、城東小学校、西中学校、東中学校である。

以下に学区の概要を述べる。学区の地図は巻末の付録を参照。なお、以後学校名で記述せず、表2-1の表記に従う。

表 2-1 対象小中学校

小/中	表記	学校名	住所
小学校	a小	城北小学校	彦根市松原町3751-3
	b小	城東小学校	彦根市京町二丁目2-19
中学校	A中	西中学校	彦根市金亀町8-1
	B中	東中学校	彦根市芹川町443

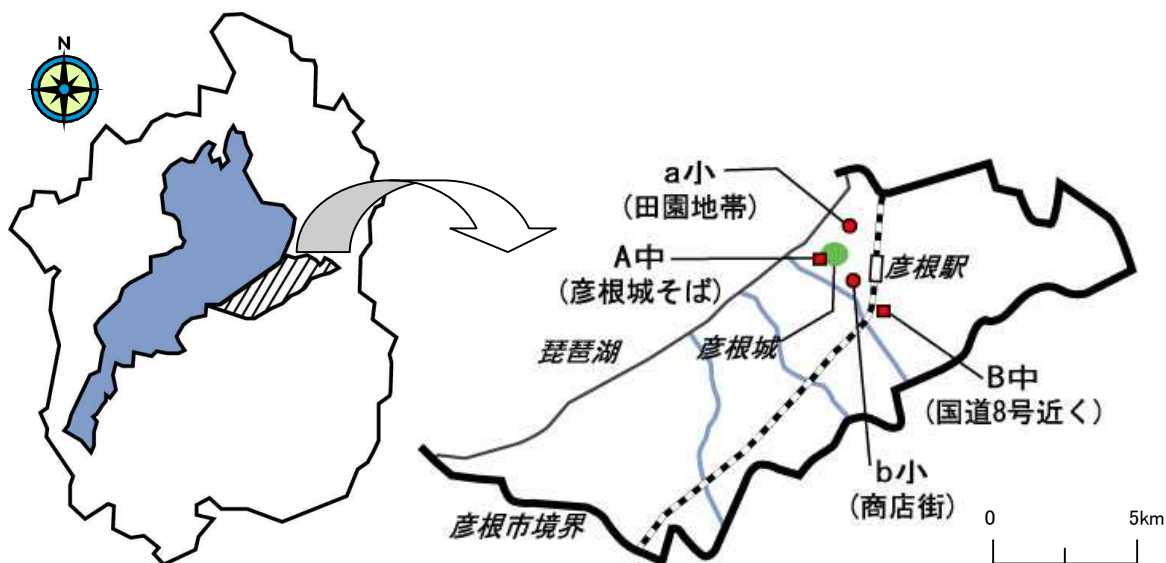


図 2-1 滋賀県彦根市の位置及び対象小中学校の位置

(1) a 小

a 小は彦根市の北部に位置し、平成 16 年 5 月 1 日現在で児童数 216 名、学級数 10(障害児学級 3 クラスを含む)クラスを有する小学校である。

学校の周辺は、田んぼや畑が多く、住宅街が点在している。西に琵琶湖、東に佐和山、南には彦根城を望める環境にあり、自然に囲まれている学区である。そのため、歩道のない田んぼ道や、車がスピードを出して通っている道などが特に危険である。

(2) b 小

b 小は彦根駅周辺の中心市街地に位置し、平成 16 年 5 月 1 日現在で児童数 448 名、学級数 16(障害児学級 2 クラスを含む)クラスを有する小学校である。

学校の周辺は複数の商店街があり、住宅が密集し、路地が入り組んでいる。市街地にある学区である。そのため、歩道のない細い路地や、車が進入可能な建物の入口が多い道などが特に危険である。

(3) A 中

A 中は彦根城敷地内に位置し、平成 16 年 5 月 1 日現在で児童数 294 名、学級数 11(障害児学級 2 クラスを含む)クラスを有する中学校である。

学校の周辺は城下町の古い街並みや観光地化された通りがあり、特徴的な市街地にある学区である。そのため、人通りの多い道や、歩道がなく道幅が狭い堀沿いの道などが特に危険である。

なお、学区内に a 小の学区を含む。

(4) B 中

B 中は国道 8 号線の近くに位置し、平成 16 年 5 月 1 日現在で児童数 812 名、学級数 26 (障害児学級 2 クラスを含む) クラスを有する中学校である。

学校の近くの国道 8 号線沿いは商店や飲食店などがあり、交通量が多い。北は彦根駅周辺の市街地、東は住宅街、南は田んぼや畑も広がっており、広範囲な学区となっている。そのため、車の交通量の多い道や、車が進入可能な建物の入口が多い道などが特に危険である。

なお、学区内に b 小の学区を含む。

2-3 調査手法の選択

2-3-1 調査手法の検討

特定の空間における意識を分析するための調査手法について表 2-2 に整理し、利点と欠点を比較し、検討した²⁾³⁾⁴⁾。

表 2-2 空間意識を調査する手法の比較

対象	手法	説明	利点・欠点
文字	① 選択式アンケート	設問に対して選択肢から適当な項目を選んでもらう方法	利: 数量的に把握しやすい 欠: 選択肢によって発想が制限される
	② 自由記述式アンケート	設問に対して自由に記述してもらう方法	利: 自由な発想が期待できる 欠: 記述能力に左右される
	③ 作文分析	テーマに対して自由に作文を書いてもらう方法	利: ②以上に自由な発想が期待できる 欠: ②以上に記述能力に左右される
	④ イメージマップ法	テーマに対して白紙に自由に地図を描かせる方法	利: 自由な発想で具体的かつ視覚的なデータが把握できる 欠: 地図を描く能力に左右される
地図	⑤ サインマップ法	道路などの部分的な枠組みのみを記入した地図に④と同じように描かせる方法	利: 制限があるため④より統一感のあるデータが把握できる 欠: 制限によって発想に影響が出る
	⑥ エレメント想起法	道路、住宅など調査区域の構成要素が載った地図を使い、その要素を知っているかを答えてもらう方法	利: 短時間に大量のデータが把握できる 欠: 一つ一つの情報量が断片的で少ない
	⑦ 絵による分析法	テーマに対して三次元の絵によって表現してもらう方法	利: 三次元による直接的なデータが把握できる 欠: 描写能力に大きく左右される
画像	⑧ 写真投影法	テーマに対して写真によって表現してもらう方法	利: 能力の高低による影響が少ない 欠: 明確に意識されているかわかりづらい

本研究では子どもを対象とするため、自由記述式アンケートや作文分析、イメージマップ法、絵による分析法のような、特定の能力に大きく左右される手法は適当ではない。また、選択式アンケートやサインマップ法のような、子どもの自由な発想を制限してしまう手法も適当ではない。さらに、机上で行う調査は子どもにとって楽しく興味を持って調査できるものではなく、そのような手法も適当ではない。

子ども自身が実地調査を行い、道路における理解や関心などを、子どもが実際に感じたイメージとは乖離しない、直接的なイメージとして把握できる手法が本研究において最も適当であると考え。そこで、本研究では子どもの空間意識を分析するために写真投影法を用いる。明確に意識されて撮影されているかわかりづらいという写真投影法の欠点に対しては、写真に直接コメントをつけてもらうことで、何を意識して撮影したかを分析できるようにし、写真一枚一枚の情報量を向上した。

2-3-2 本研究における「写真投影法」の定義

本研究の調査では、写真投影法を考案した精神医学者の野田⁵⁾や子どもと空間との関わりを分析する手法として写真投影法を検証した久ら²⁾の先行研究から写真投影法を参考にした。ただし、そこでは「しっかりと意識や評価を通して撮影されたものであるかどうかについて不安定さが残る」²⁾という欠点が指摘されている。それを補うために、本研究では写真現像後に写真へ直接危険と思った理由や対象を書き込む写真記録表調査を実施した。

そこで、本研究では、カメラを用いた調査と写真記録表の調査を合わせて「写真投影法」として用いる。

2-4 調査の流れ

本研究で行う調査の流れと内容を以下に示す。なお、本研究において通学路における危険箇所調査とは、カメラ調査と写真記録表による調査を合わせたものを言う。

表 2-3 調査の流れと内容

日程	時間帯	所要時間	内容	子どもの作業
一日目	帰りの会	約15分	カメラ調査説明	名前記入など
	放課後		カメラ調査	カメラ撮影、地図記入
二日目	朝の会	約3分	カメラ調査回収	
	→		カメラ現像へ	
三日目	帰りの会	約5分	写真記録表、アンケート説明	名前記入など
	放課後		アンケート等調査	アンケート等記入
四日目	朝の会	約3分	アンケート等調査回収	

調査一日目は筆者自ら(B中では先生が代行)カメラ調査の説明を行い、必要な備品を配布、その日の放課後にカメラ調査を行ってもらった。

翌日にカメラ調査の結果を回収した。その後、カメラ現像を行った。

カメラ現像後、アンケート調査と写真記録表調査の説明を行い、その日の宿題という形式で実施した。最終日にアンケートと写真記録表を回収し、調査を終えた。

2-5 通学路における危険箇所調査

2-5-1 通学路における危険箇所調査の概要

本研究では、通学路において交通事故の危険を感じる場所を把握するため、カメラ調査と写真記録表調査の大きく分けて二つの調査を実施した。以下に流れを説明する。

(1) カメラ調査⁶⁾

- 27 枚撮り使い捨てカメラ(以下カメラ)で「事故になりそうな危ない道」(以下危ない道)を撮影
 - 学区の地図に撮影場所、通学路、自宅の場所を記入
- ※ b 小では自宅の場所ではなく、集団登校時の集合場所を記入

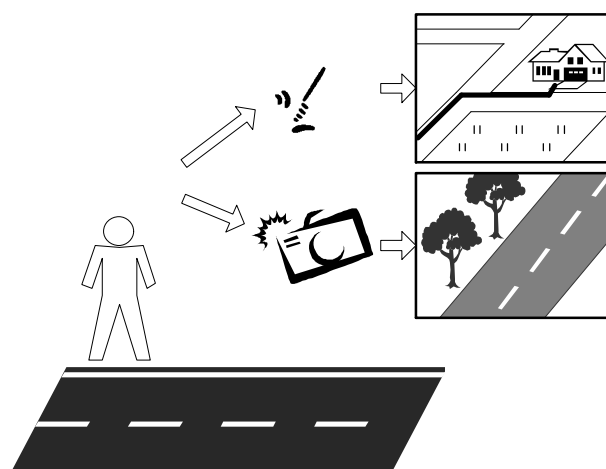


図 2-2 カメラ調査

(2) 写真記録表調査⁶⁾

- 写真現像後、撮影した写真を見ながらどこがどう危険であるか、直接コメントを書き込む
- 調査時の通学手段、通学人数について記入

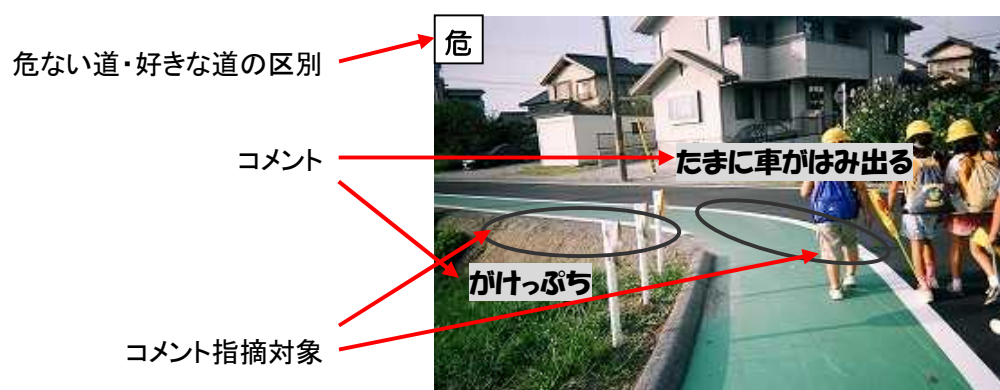


図 2-3 写真記録表調査

2-5-2 好きな場所の調査

カメラ調査では危ない道だけでなく、「好きな道」(以下好きな道)も撮影してきてもらった。

本調査に際して危ない道は、学校や地域での安全教育などの影響を受け、体験とは別に知識的に把握している部分が多いと考えられる。そこで、比較的そのような知識の影響を受けづらく、かつ外遊び体験などから体験的に認知していることが多いと思われる、好きな道も撮影してもらうこととした。好きな道を撮影した写真で、その調査対象者が体験から認知へ与えている影響を明らかにする。そして、危ない道を撮影した写真で、体験からの危険性認知への影響を明らかにしようと考えた。

しかし、調査実施後に好きな道を撮影した調査対象者の人数が少なかったことから、上記の検証は行わず、危ない道とは別に好きな道の分析として行った。

好きな道の認識は、事故の危険に対する認識というマイナス面に対する認識ではなく、プラス面の認識である。そこで、外遊び体験と認識との関係を探る上で、プラス面の認識である好きな道を調査、分析することは意義があると考ええる。

2-6 外遊び体験に関するアンケート調査

本研究では、外遊び体験を明らかにするため、アンケート調査⁶⁾を実施した。

小学生に対してのアンケート内容は以下。

表 2-4 小学生に対するアンケート項目①

内容	現在の遊び頻度
質問	あなたは今学校の時間以外にどれくらい外で遊んでいますか？
方法	一つ選択
回答項目	ほぼ毎日
	週に四、五日程度
	週に二、三日程度
	週に一日程度
	月に二、三日程度
	月に一日以下

表 2-5 小学生に対するアンケート項目②

内容	現在の遊び場所
質問	あなたが今よく遊びところはどこですか？
方法	複数選択可能
回答項目	小学校
	公園
	山
	川や池
	琵琶湖
	友達の家
	寺・神社
	スーパーマーケット・コンビニエンスストア
	商店(駄菓子屋・おもちゃ屋など)
	彦根城
	空き地
回答項目	田んぼ・畑
	道路
	その他(具体的に書いてください)

表 2-6 小学生に対するアンケート項目③

内容	小学校低学年の頃の遊び頻度
質問	あなたは小学校低学年の頃学校の時間以外にどれくらい外で遊んでいますか？
方法	一つ選択
回答項目	今よりもっと多く遊んでいた 今より少しだけ多く遊んでいた 今と変わらない 今より遊ぶことは少なかった 今より遊ぶことはかなり少なかった

表 2-7 小学生に対するアンケート項目④

内容	小学校低学年の頃の遊び場所
質問	あなたが小学校低学年の頃よく遊んだところはどこですか？
方法	複数選択可能
回答項目	小学校 公園 山 川や池 琵琶湖 友達の家 寺・神社 スーパーマーケット・コンビニエンスストア 商店(駄菓子屋・おもちゃ屋など) 彦根城 空き地 田んぼ・畑 道路 その他(具体的に書いてください)

中学生に対してのアンケート内容は以下。

表 2-8 中学生に対するアンケート項目①

内容	現在の遊び頻度
質問	あなたは今学校の時間以外にどれくらい外で遊んでいますか？
方法	一つ選択
回答項目	ほぼ毎日 週に四、五日程度 週に二、三日程度 週に一日程度 月に二、三日程度 月に一日以下

表 2-9 中学生に対するアンケート項目②

内容	現在の遊び場所
質問	あなたが今よく遊びところはどこですか？
方法	複数選択可能
回答項目	中学校 公園 山 川や池 琵琶湖 友達の家 寺・神社 スーパーマーケット・コンビニエンスストア 商店(駄菓子屋・おもちゃ屋など) 彦根城 空き地 田んぼ・畑 道路 その他(具体的に書いてください)

表 2-11 中学生に対するアンケート項目④

内容	小学生の頃の遊び場所
質問	あなたが小学生の頃よく遊んだところはどこですか？
方法	複数選択可能
回答項目	小学校 公園 山 川や池 琵琶湖 友達の家 寺・神社 スーパーマーケット・コンビニエンスストア 商店(駄菓子屋・おもちゃ屋など) 彦根城 空き地 田んぼ・畑 道路 その他(具体的に書いてください)

表 2-10 中学生に対するアンケート項目③

内容	小学生の頃の遊び頻度
質問	あなたは小学生の頃学校の時間以外にどれくらい外で遊んでいますか？
方法	一つ選択
回答項目	今よりもっと多く遊んでいた 今より少しだけ多く遊んでいた 今と変わらない 今より遊ぶことは少なかった 今より遊ぶことはかなり少なかった

項目に関しては、子どもの遊び環境について研究したものの中から、遊び場所や空間のみに焦点を当てたものではなく、遊び環境全般を取り扱っているものを参考にした。⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾

特に、仙田⁷⁾が遊び環境の四つの要素を「あそび時間、あそび空間、あそび集団、あそび方法」としている点を参考に、本研究では時間と空間について扱うことにした。理由は、外遊びにおいて、「あそび集団」や「あそび方法」に関係なく、道を通ることが多いと考えたためである。

また、現在だけでなく、過去の外遊び体験が認識に影響を与えている場合があるので、過去についても尋ねることとした。そこで、本研究では、「あそび時間」は遊び頻度、「あそび空間」は遊び場所として現在と過去における遊び体験のアンケート調査を実施した。

遊び頻度に関しては複数の選択肢の中から一つを選択する形式で、遊び場所に関しては複数の選択肢の中から当てはまるものを全て選択する形式で実施した。

遊び場所には、スーパー・コンビニ、友達の家なども含めた。これは、道路への危険性認識は道路を通して移動することを通して養われると考えたため。また、外遊びと言っても実際に山や川などで外遊びをしている子どもは少なく、調査結果において多様性が認められないのではないかと考えたためである。

なお、外遊び体験とは関係ないが、性別を尋ねる質問をこのアンケート中に設けた。

- 1) 彦根市教育委員会学校教育課:彦根市立小学校・中学校・幼稚園
<<http://edu.city.hikone.shiga.jp/gakko/syukai/index.html>>,2004/12/03
- 2) 久隆浩,鳴海邦碩:子どもと地域空間の関わりを分析する手法としての写真投影法の試み,第 27 回日本都市計画学会学術研究論文集,pp715-720(1992)
- 3) 日本建築学会編:建築・都市計画のための調査・分析方法,井上書院(1987)
- 4) 日本建築学会編:建築・都市計画のための空間学,井上書院(1990)
- 5) 野田正彰:漂白される子供たち その眼に映った都市へ,情報センター出版局(1988)
- 6) 調査票は巻末の付録を参照
- 7) 仙田満:子どもとあそび,岩波書店,pp148-175(1992)
- 8) 岡田英紀,仙田満:都市化によるこどものあそび環境の変化に関する研究-横浜市における経年比較調査-,第 26 回日本都市計画学会学術論文集,pp61-66(1991)
- 9) 仙田満,岡田英紀:こどものあそび環境の構造的変化に関する研究-横浜・山形における経年比較調査による-,第 28 回日本都市計画学会学術論文集,pp763-768(1993)
- 10) アグスプラボウォ,小林英嗣,他:都市における児童の遊び環境に関する研究-札幌の小学校区内でのプレイスペースネットワークについて-,第 28 回日本都市計画学会学術論文集,pp757-762(1993)
- 11) 土屋哲,高橋白寿,他:積雪地域における子供の遊びについて 新潟市での調査と解析,日本建築学会計画系論文報告集,第 418 号,pp71-81(1990)
- 12) 水月昭道,南博文:子どもの遊び環境研究の動向と展望,九州大学大学院人間環境学研究院紀要,第 4 号,pp25-36(2003)